

Foundations of Information Ethics 情報倫理の構築

プロジェクトリーダー 水 谷 雅 彦

京都大学 大学院文学研究科 助教授



図 1 FINE フォーラムの様子

1. 研究目的

「情報倫理 (Information Ethics)」は、応用倫理学 (Applied Ethics)」の最も新しい部門の一つである。今世紀の後半にテクノロジーが爆発的に発展した結果、新しい問題群が人間社会につきつけられたが、既成の社会的諸規範および既存の倫理学はそれに十分に即応することができなかった。このような問題意識に基づいて、現代社会の倫理的コンフリクトの解決をめざす学問領域として応用倫理学が今世紀後半に成立した。いわゆる生命倫理学や環境倫理学は、わが国においても一定の成果をあげているといつてよいが、計算機やネットワークに関わる領域をあつかう情報倫理学は、我が国のみならず世界的に見ても未だ萌芽的な研究にとどまっているのが現状である。しかし、コンピュータ・サイエンスの急速な進歩、さらにはインターネットに代表される世界的なコンピュータ・ネットワークの発達をもたらした倫理的問題の解決は、その緊急度の点においても最大級の課題となっている。特に、コンピュータやネットワークの不正使用、ネットワークと文化間摩擦、プライバシー管理、ネットワークにおける著作権や責任といった問題は、各種専門領域をこえて急速に議論される必要がある。

当研究プロジェクトは、このような状態に対応すべく、国内においてすでにこの領域での研究に着手している倫理学者を中心に、社会学、情報通信工学、法学などの研究者の協力を得て、世界的レベルでの情報倫理学の構築をめざすものである。

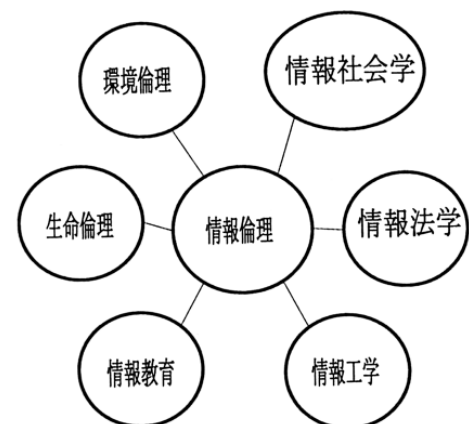


図 2 情報倫理と他分野

2. 研究の内容

(1) 情報倫理学の理論的基礎づけ

錯綜した情報倫理的問題の解決と一般のコンセンサスの獲得のためには、「情報」「プライバシー」「コミュニケーション」「福祉」「文化」等々の基本的概念の哲学的な精密化と議論の整理が必須であるが、わが国ではほとんど顧みられないことがない。言論の自由が制限されねばならないとすればそれはどのような場合か、プライバシーはなぜ尊重すべきであるのか、知的所有権という制度はなぜ必要であるのか、ヴァーチャル・リアリティは我々の倫理観にどのような影響をあたえるか、コンピュータの誤動作や情報に欠陥があった場合責任の所在はどこになるのか、望まれる電子コミュニケーションはどのようなものか、そもそも我々の倫理観の起源はどこにあり、またどのようなものか、といった問題をより精密に議論することを可能にする理論的基礎づけを行う。京都大学拠点を中心として研究を行なっている。

(2) 諸応用倫理学理論の統合

情報倫理学はいまだ未開拓の分野であり、情報学・ネットワーク工学・法学等の研究に加え、すでに確立された他の応用倫理学（生命倫理学、環境倫理学等）の成果を積極的にとりこむことが必要であり、また非常に有用である。一例をあげれば、医療カルテ情報の扱い、環境情報の評価方法等についてすでに確立された研究をもとに、より広い視野から情報倫理学をより豊かなものにする。この課題については千葉大学拠点を中心として研究を行なっている。

(3) あるべき情報倫理教育像の確立

コンピュータの利用層が若年化していること、既にネットワーク利用での社会的・倫理的問題が多発していることを見れば、情報倫理教育の確立が早急に必要とされているのは明らかである。内外の教育機関との交流と連携を通して、理想的な情報倫理教育のありかたを考察すると同時に、具体的な教育システムの構築への助言と教材の提供を行なうことが目標とされる。この課題を達成するために、大規模な情報倫理教育の実態調査（全国約500校）を行い、関係各省庁および高等教育期間の研究者、初中等教育の現場の教諭、関連諸団体と連携しつつ、今後の情報倫理教育カリキュラムのあり方を検討している。この課題については広島大学拠点を中心として研究を行なっている。

(4) 学際的交流による公開討論による議論の深化

さらに、当該の問題群への取り組みが相当の専門的知識を要求することに鑑み、情報通信工学・社会学・法学・経済学・心理学等多様な研究者との研究交流フォーラムを行ない、議論を深化させている。このフォーラムは一般に公開の形で行なわれ、問題の周知と議論の徹底に役だっている。電子情報通信学会、インターネットと教育フォーラム等多種の研究団体との交流も盛んである。

(5) 情報倫理事例集・資料データベースの作成

情報化社会での倫理問題を考察するためには、国内外の情報倫理に関する資料を網羅的に収集し、研究者および一般市民が利用可能なデータベースを構築することが必要である。ネットワーク上で生じた各種のトラブルと倫理問題の実例や、各国の法規、各機関における倫理綱領などの一次資料に加えて、情報倫理に関するあらゆる研究文献を収集し、国内初の情報倫理資料センターとしての役割を果たし得るものを作成している。これはもちろん教育資源としても利用されうるものであり、資料価値は非常に高いものである。

また、電子ネットワークの性質上、一国の政策決定や立法化に限定されない視野が必須であるため、海外での実態調査や研究者との討議、研究協力を行っており、これにより当プロジェクト作成のデータベースも諸外国の研究者によるデータベースとリンクされ、本研究も国際的な共同研究へと発展しつつある。

3. 研究の体制

機関：1998年7月～2003年3月

構成：プロジェクトリーダー：水谷雅彦（京都大学文学研究科助教授）

コアメンバー：3人、研究協力者26人（内ポストドク3名）

実施場所：京都大学文学研究科（京都市左京区吉田本町）、広島大学文学部（東広島市鏡山1-2-3）、千葉大学文学部（千葉市稲毛区弥生町1-33）

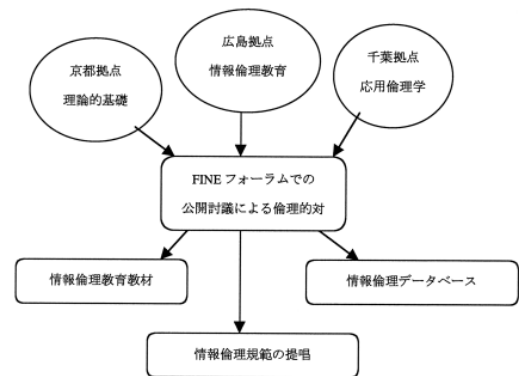


図3 各拠点の研究分野



図4 FINE 情報倫理データベース